



Negative Entropy (Dazaifu Tenmangu, Morning Ritual, Purple, Double), 2021

©Mika Tajima
Courtesy of TARO NASU
Photo by Yasushi Ichikawa

れである呼吸をそのまま形にとどめたような、不定形のガラス作品だ。「初めて太宰府天満宮に来てこの空間に身を置いたとき、いろいろなものがエネルギーに見えました。例えば毎日お祈りをすることや、木や石をリスペクトする気持ちがそうです。声を織物にしたり、息をガラスにしたり、テクノロジーを使ってエネルギーに形を与えました。形を変えることは、世界を理解する方法の一つで、アートはそれに適していると考えています」。

彼女の今回の展覧会は「Appear」すなわち「目に見えるように現れること」と名付けられた。

あらゆるものの二つ(以上)の側面

田島さんの作品は、美しい。シリーズで初めて蓄光性のある素材を用いて制作された《アール・ダム・ブルモン》という作品は、展示室内の光を吸収してエネルギーを蓄え、暗がりでは淡い光を放つ。キャンバスの表面に絵を描く一般的な手法とは異なり、透明なアクリル樹脂の支持体に霧状の絵の具の粒子を封じ込めた。何色と限定できない豊かなスペクトラム状の色彩が美しい。

「よくそう言われますが、わたしの作



自營する人
田島美加さん

自 太 太宰府
博 會 宮

これまでの千年、
これからの千年、

見えないものに
形を与える

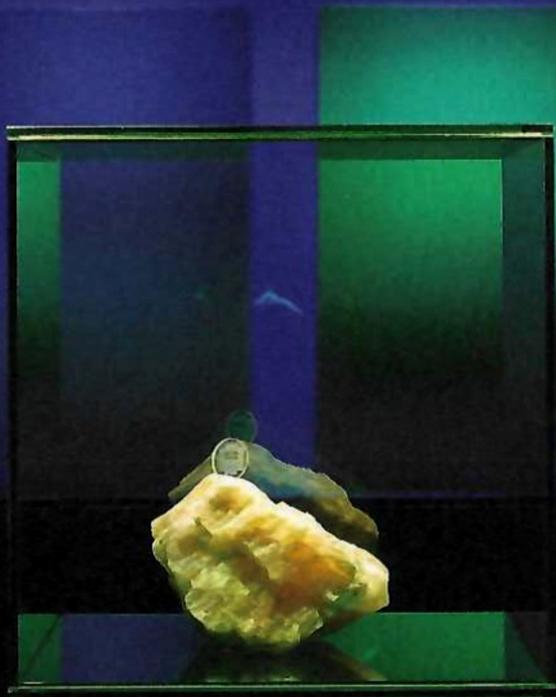
太宰府天満宮を訪れたときに感じる「なにか」。ニューヨークを拠点に活動するアーティストの田島美加さんは、太宰府天満宮アートプログラム Vol.111で、その「なにか」を目に見える形として表す作品群を制作した。例えば《ネガティブ・エントロピー》シリーズでは、滞在中に耳にした参拝客のざわめきや日々奏上される祝詞を録音し、それをデータ化してジャカード織機で織り上げた。太宰府天満宮の音の肖像画だ。《アニメ9》は、命の営みの現



Anima 9, 2021

このような多層的な視点は作品に通底していて、彼女はどこか一つの視座だけに体重をかけることをしないように気をつけているように見える。それを表すように「田島さんの作品は抽象度が高く、自分のことのようにも、みんなのことのようにも思えます」と伝えたときに、次のような答えが返つ

「なにかを祈る、という姿勢に共感。」



Sense Object, 2021

ニュースからあいさつ、炎上まで、あらゆるものが含まれています。大切なものからくだらないものまで、全部。すべてが等しい重さなのが今の時代で、それを同等に扱うというアイデアには詩的な感覚がありました。

今回の展覧会では、田鳥さんの作品と同時に、天満宮に長く伝わる宝物の一部も展示された。その中の一つに、雨乞いの祈禱に使われた石がある。

「昔の人が石に祈るというテクノロジーを使って雨乞いをするのを、わたしたちは素朴だと感じます。ただ『なにかを祈る』という姿勢にはとても共感します。エッチングというテクノロジーは、十億年の未来まで残ります。未来の人たちも同様に、わたしたちのテクノロジーを素朴なものに感じるかもしれません。ここに込めた気持ちは伝わるはずですよ」。

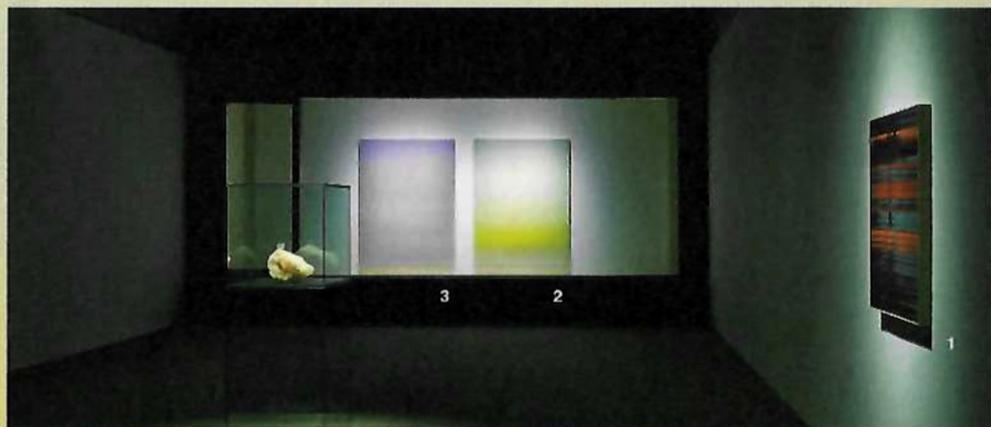
てきた。「確かに作品を作るときに、『個』と『集団』のどちらのことも考えていると思います。だから、作品を見て人と繋がっていると感じる人もいるかもしれないし、oh my god! こんなにたくさん人がいるのに、その中でわたしは一人ぼっちだと思う人もいるかもしれません。わたしは、人やアイデアンテイテイや関係を、柔らかいものだと感じています。わたし自身、女性でアジア人でミドルエイジですが、自身を構成しているのはそれだけではありませんし、時間が経てばそれすら移ろうものです」。

意味を一つに閉じないこと、見ている人に可能性を開くこと。ここに、彼女の作品に魅了される理由の一つがあるのかもしれない。

1 Negative Entropy (Dazaifu Tenmangu, Morning Prayer and Offerings, Slate, Single), 2021

2 Art d'Ameublement (Araveke), 2021

3 Art d'Ameublement (Karena Malhiva), 2021



十億年残る人々の声

田鳥さんは、今回のプロジェクトにあたって、これまでに太宰府天満宮に流れた、そしてこれから流れる「時間」のことを考えた。「アメリカで制作をするときには、あまり時間のことには気にしません。わたしの作品はいろいろなテクノロジーを使うので『五年後にはメンテナンスにいく必要があるかな?』と考えるくらい。ところが太宰府天満宮は千年前からあつて千年後にも残ることを考えると、まさきに『千年後のメンテナンス、どうしよう。わたしは死んじゃっている!』と思いました」と笑う。

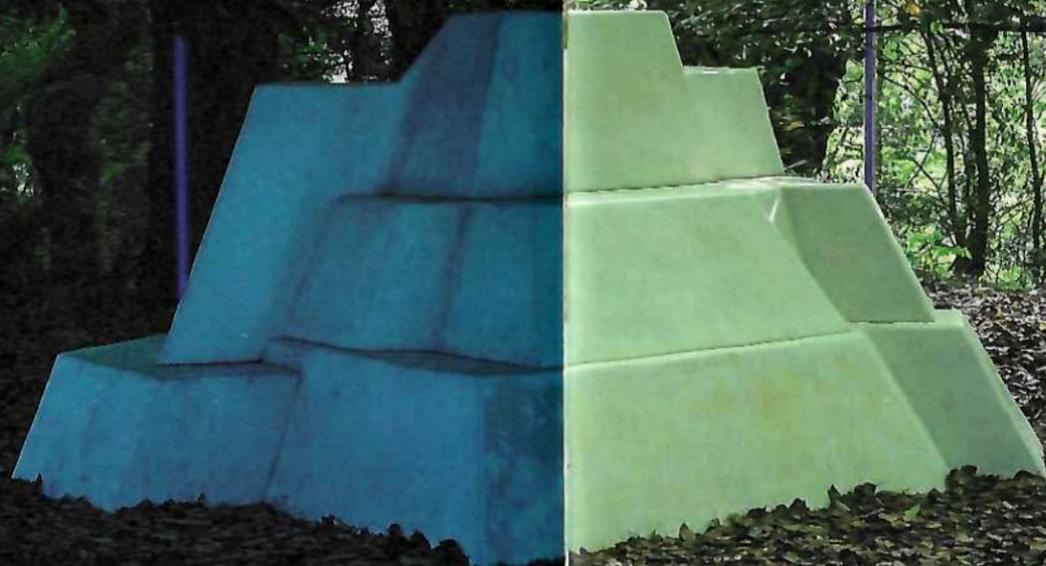
《センス・オブジェクト》は、令和二年(二〇二〇)一年分のすべての日本のTwitterのつぶやきをデータ変換し、クリスタルにレーザーでエッチングした作品だ。大量の情報を十億年にわたって保存できるハイテクノロジーを用い、世代を超えることを意図した。「一年分のつぶやきには、シリアスな

山の中で続く営み

二つの作品が、太宰府天満宮の境内に恒久展示されている。天開稲荷社に続く山道を登っていくと、突然まるで未来からやってきた宇宙船のようなのはたまた古代のピラミッドのような作品《エコー》が現れる。《エコー》は、周りに六本立つ《ナルキッソス》が発したブラックライトと太陽光を浴びて帯電し、日没後に山が暗闇に包まれてもなお淡く光り続ける。これを田島さんは、訪れた人が瞑想をするような場所になってくれればいいと考えた。ギリシャ神話によれば、エコーは自分の声で話すことはできず、他人の声をただ繰り返すのみだという。山の中に佇む《エコー》もまた、訪れる人の

思念を吸い込み、それをつぶやき返すように光るのかもしれない。「人つて他人のためだけに存在するのでしょうか？ それとも自分だけのためでしょうか？ もしもエコーがあるとすればそれはどこか、または誰かからの音やエネルギーという源があるということになるのではないのでしょうか？」

田島さんの発したこの問いもまた、太宰府の山の中で反復され続ける。



太宰府天満宮アートプログラムとは

「文化の神様」である菅原道真公を御祭神としてお祀りしている太宰府天満宮は、人々が行き交い集う場としての「開放性」と、1,100年以上昔から変わらない天神信仰の場としての「固有性」という2つの性質を併せ持つ。この2つのキーワードをテーマに掲げ、平成18年(2006)から行われているのが「太宰府天満宮アートプログラム」である。

Echo, 2021 and Narcissus (Dazaifu), 2022